

岡山藩神職請制度補考

水野恭一郎

一

江戸幕府のもとでキリスト教禁止の政策にともなうて、庶民のキリスト教徒にあらざることの証明を、それぞれの檀那寺によって行なわせる、いわゆる「寺請」の制度が全国的に施行された中で、岡山藩では藩主池田光政の時代に、この宗門請合を、仏教寺院である檀那寺にかえて、領内それぞれの地域の神社の神職によって行なわせる制度が実施された。この制度が「神職請」、あるいは「神主請」、また「神道請」とも呼ばれて、寛文六年（一六六六）から、光政卒去後の貞享四年（一六八七）に至る、およそ二十年にわたって領内に広く行なわれ、岡山藩の宗教政策上の問題としてのみならず、江戸幕府の宗教制度の中での特異な事象として、世の注目を浴びたのである。

この岡山藩神職請の問題については、さきに「備前藩における神職請制度について」と題して、その思想的ないし政治的背景、実施の状況および推移などについて、一応の考察を進めた拙論を発表したが、この前稿において、なお十分詳しく触れ得なかった問題や、これに関連する史料で紹介しておきたいものなども若干のこされていたので、本稿は、これらの点について、蛇足ながら、いささか補考を試みようと思図したものである。

二

岡山藩主池田光政が、寺請にかわる神職請の制度を、その領内に実施せしめるに至った事情については、前稿において論述したように、光政が極めて熱心な儒教の信奉者であり、その儒教尊重の立場から、ひいては排仏論的な思想を、早くから懷くようになっていたことが、その根底にあったことは確かである。しかし、これが藩の宗教政策の上に、現実の政治的問題として表面化されてきたことには、神職請施行の前年の寛文五年に、幕府から諸宗寺院一般に對するかなり厳しい統制令的な法度が相ついで出されたことが、直接の契機となつたと思われる。即ち、寛文五年七月十一日付で、諸国の諸宗寺院および僧侶のことに關して、二つの注目すべき禁令が公布されている。その第一は左記の諸条目である。

定

一 諸宗法式不_レ可_二相乱_一、若不行儀之輩於_レ有_レ之者、急度可_レ及_二沙汰_一事、
 一 不_レ存_二一宗法式_一之僧侶、不_レ可_レ為_二三寺院住持_一事、

附、立_二新義_一、不_レ可_レ說_二奇恠之法_一事、

一本末之規式不_レ可_レ乱_レ之、縱雖_レ為_二本寺_一、對_二末寺_一、不_レ可_レ有_二理不尽之沙汰_一事、

一 檀越之輩、雖_レ為_二何寺_一、可_レ任_二其心得_一、僧侶方不_レ可_二相爭_一事、

一 結_二徒党_一、企_二鬭諍_一、不似合事業不_レ可_レ仕事、

一 背_二国法_一之輩到來之節、於_レ有_二其届_一者、無_二異儀_一可_レ返之事、

一 寺院仏閣修復之時、不_レ可_レ及_二美麗_一事、

附、仏閣無_二懈怠_一掃除可_二申付_一事、

一寺領一切不可賣買之、并不可入賣物事、

一無由緒者、雖有弟子之望、猥不可令出家、若無拋子細於有之者、其所之領主・代官江相斷、可任其意事、

右条々、諸宗共可堅守之、此外先判之条数、弥不可相背之、若於違犯者、隨科之輕重、可沙汰之、猶載下知狀二者也、

この禁令においては、諸宗の僧侶、殊に住持たるものの心構え、資格について厳しく令し、更に注目されることは、由緒なき者がみだりに出家することを禁じ、もし、よんどころなき子細があつて出家を望む者については、その所の領主ないし代官の許可を必要とするとしているのである。これと同日付で出された第二の禁令は、

条々

一僧侶之衣鉢、応其分際可着之、并仏事作善之儀式、檀那雖望之、相応輕可仕之事、

一檀万建立由緒有之寺院住職之儀者、令為檀那計之条、從本寺遂相談、可任其意事、

一以金銀、不可致後住之契約事、

一借在家、構仏檀、不可求利用事、

一他人者勿論、親類之好雖有之、寺院坊舍女人不可抱置之、但、有來妻帶者可為格別一事、

右条々、可相守之、若於違犯者、隨科之輕重、可有御沙汰旨、依仰執達如件、

というもので、僧侶の風儀を正し、殊に寺院坊舍に女人を抱え置くことを堅く禁じているのである。

この二つの禁令が、光政の寺院淘汰政策を進める上での有力な根拠となったことは、寛文七年六月に、江戸の天台宗総本山である東叡山寛永寺からの訴えによって、幕府の老中から、岡山藩内の天台宗寺院僧侶還俗についての事情が尋ねられたとき、備前国磐梨郡元恩寺の寺中、三学院・智乗坊・宝積坊の三坊還俗の事情について、磐梨郡の村代

官村主九右衛門が差出してゐる書上げに、

右三坊還俗之様子へ、去年春之比か、御公儀様々、寺方弟子ヲ取申候へ、国主江相断、吟味之上ニテ取可レ申

候、并、寺内ニくりうばニ而も抱置申間敷旨、御書出し廻り申候、然上ハ耕作も難レ成、其上、旦那中ハ神儒ニ

入候へば、寺之便ニも不レ罷成、迷惑仕居申候処ニ、奉行所へ申渡し候へ、右之通ニ而ハ家業も無レ之、難儀可レ

為候、乍レ去、各ハ好キ田地持申候間、還俗致し、男女ヲ抱、耕作仕間敷候哉、但其方分別次第可レ為と申聞せ候、

右三坊も様々思案仕躰と相見へ申候、他国へ参候ても出家ヲ立可レ申便も無レ之ニ付、出家中間方々談合仕ル由ニ

御座候得共、宜敷事も無レ之処、百姓旦那共異見仕候へ、各清僧ヲ立、何之家業も無レ之ハ、初終堪忍も成申間敷

と笑止ニ存候、幸能田畠も在レ之義候間、還俗之上、耕作致し、安座仕候方か可レ然候へんと申候得へ、早速還俗

仕、右之三学院ハ清右衛門と名ヲ替、神職ニ罷成、智乗坊ハ安兵衛、宝積坊ハ理兵衛と申候、何茂耕作仕居申候、

と述べられており、同じく赤坂郡正満寺の寺中、妙覚院・成就坊・妙円坊の三坊還俗の事情について、赤坂郡の村代

官和田太郎左衛門が差出した書上げにも、

御公儀様々寺々へ被ニ仰出ニ御法式之通申聞、兎角弟子取かたく、又は在ニ^(愚)申故、作不レ仕候へハ迷惑仕候、作

し仕候へハ、寺院ニ女人無ニ御座ニ候てハ作物こなし成かたく御座候へ共、本寺々坊守置申間敷旨申渡スニ付、近

年寺院ニ^(愚)い申女頼こなし仕候へ共、去春御江戸へ之御書付之通相守候へハ、作不レ成ニ付、右之通申聞、還俗仕、

自由作等も可レ仕哉と申聞候、

と記されており、前掲の幕府の禁令の条文が巧みに利用されて、僧侶の退寺・還俗のことが、郡奉行や村代官を通じて勧め促されている状況をうかがうことができる。

一方その間に、磐梨郡代官の書上げの中にも述べられていたように、領内の一般庶民たちに対する儒教信奉への誘導、それにもなう檀那寺からの離脱のことが、藩主光政の信念に基づいて、熱心に勧められていたことも、寺僧還

俗の趨勢を促進する根本的な条件としてあったことは勿論である。寛文七年四月晦日付で、光政が大老酒井雅樂頭忠清へ書き送っている書状に、

先日御物語仕候ことく、尤所ニハより候得共、近年国元之民共、出家共之私欲を以、人をたふらかし候を見かきり、儒学を好申者、端々在_レ之ニ付、何之か分も無_レ之者共も、右之者之申所ヲ聞馴、坊主をうとみ申、神儒を好風、所々多御座候、然る所ニ、去々年寺方へ之被_レ仰出_二之御条目を、末々ニ而も承、御公儀ニも出家をハ、さのみ御用ハ不_レ被_レ成と申なし、又ハ私儒ヲ好申ニ付、弥どころもなく右之通ニ罷成候、たとへハ一村之内ニ、少ニ而も仏法信仰仕候者ハ一人か二人にて御座候、残りハ儒とも仏とも考なき者ニ而御座候故、私好候事ニ而候得ハと申、葬祭ヲ神儒ニ仕候者、多罷成候事、

と記して、領主である光政が熱心な儒教信奉者であることにひかれて、領民の間にも、次第に仏教を捨てて儒教を奉ずるものが多くなつた事情を述べ、また、そのことが領内諸寺院の住持還俗へつながる結果にもなつたことに言及して、

此度国元出家還俗之子細は、右如_ニ申候ハ、旦那すくなく罷成、又ハ去々年之御書出ニ、寺々ニ女停止と御座候ニ付、在々ノ坊主共ハ大かた百姓同前ニ作_レ仕候、就_レ夫、男之下人ハ存様ニハ持不_レ申、くりうばと申候而女ヲ抱置、耕作之助ニ仕候、此段ひしと致_ニ迷惑_一候而、兼々還俗仕度存ル出家、多罷成候事、

去七月之比、私用之儀候而、国端牛窓と申所江罷出候、此所ニ儒ニ志、奇特なる者共四五人も御座候、出家ニも還俗仕、志実成者御座候故、召出ほうひなと遣候キ、加様之儀承伝、弥うるをひ立罷在候、

と述べているのは、ほぼ、その実情を伝えているものとみてよいであろう。

更に、これらのことに加えて、この時期に光政をして藩内の寺院淘汰政策を推進せしめる重要な条件となつたものに、日蓮宗不受不施派禁教の問題がある。日蓮宗不受不施派の宗派勢力には、受派・不受派對立のこともからんで、

幕初以来消長があつたが、寛文五年三月に幕府から、全国の寺社領のうち朱印地をもつ寺社に対して、朱印状の再交付に関する御触が出されたとき、不受不施派にとつて重大な問題が起つた。この朱印状再交付に関する御触は、^⑧

一御当家御三代之御朱印所持之寺社之輩勿論、御兩代之御朱印頂戴之分迄、不^レ依^三寺社領之高下ニ^一、繼目御朱印可^レ被^レ下之事、

一御一代之御朱印頂戴之寺社領は、先五拾石以上之分、御朱印可^レ被^レ下事、

一寺領無^レ之、境内計之御朱印雖^レ在^レ之、於^三一宗之本寺ニ^一、繼目御朱印可^レ被^レ下之事、

右之通、被^三仰出^一候間、面々領分有^レ之寺社之輩、今年六月中、江戸え、先御代之御朱印持参候様ニ、可^レ被^三相触^一之候、

というもので、この御触自体の意趣は、幕府が幕初以来の寺社領朱印地の実態を再確認しようとしたものであつた。しかし幕府は、この御触を出したとき、特に日蓮宗の寺院一般に対して、同年七月の末に、御朱印を新たに頂戴するに先立って、

今度御朱印頂戴仕候儀、御供養ト奉^レ存候、不受不施ノ意得トハ各別ニテ御座候、

との文言を書いた手形を出すことを令した。そして、この文言を不服として手形の提出を渋つた不受不施派の寺院に対して、十一月二十二日、改めて、

此度御朱印頂戴仕候儀、難^レ有御慈悲ニ御座候、地子・寺領悉御供養ト奉^レ存候、

という文言で、手形を差出すべきことを強く求めた。^⑨このような事態のもとで、不受不施の教条を固く守つて、手形の提出を拒んだ不受不施派の寺院は、天下の大法に背き、幕府の統制を紊るものとして、寺僧追放、禁教の措置がとられることとなつたのである。

このことは、領内に不受不施派寺院が殊に多く存在した岡山藩に、大きな影響を与えるに至つたことは当然であつ

て、前掲の寛文七年四月晦日付、大老酒井忠清宛の池田光政書状の中には、

上方ニ有^レ之日蓮宗妙覺寺より国元蓮昌寺江申越候は、今度公儀より被^ニ仰付^ニ候ことく、備前ニ在^レ之不受不施之本寺之坊主追放仕候様ニ、私ニ訴訟可^レ仕候、若同心不^レ仕候ハ、江戸江御訴訟可^ニ申上^一と申越候、其返事ニ、此坊主之儀、寺ヲ其方江渡し候へとハ被^ニ仰出^ニ候、坊主追放仕候様ニとハ終ニ不^レ被^ニ仰聞^ニ候間、御寺社奉行衆江相尋可^レ申と申遣候、此儀ヲ末寺とも承、^{迎^と追放}追放ニ逢可^レ申と存候処ニ、御寺社奉行衆より參候御案紙之通、書物ニ判形不^レ仕候故、本寺之坊主御差図之通追放仕候ヲ、末寺共承、此時おひたしく還俗仕候、世間ニ而ハ右之様子ハ不^レ存、一入甚申付と沙汰可^レ仕と被^レ存候事、

と記されて、岡山藩では不受不施派に対して殊に厳しい弾圧が行なわれているかのように世間で噂されているが、不受不施派の寺僧追放のことは、もともと当時受派であつた京都の妙覺寺からの示唆により、幕府の意向を伺つた上での措置であり、また事態を察した寺僧みずからの考えで、還俗という行動をとるものも多かつたのが実情であるとしている。しかし、いずれにしても、この寛文五年の日蓮宗不受不施派に対する幕府の禁教政策が、池田光政の領内寺院の淘汰、ひいては、その結果としての寺請から神職請への移行措置を推進せしめる重要な契機をつくり出したものであつたことは否定できない。

このような諸条件をふまえ、自己の信条に基づく政策遂行への基盤を巧みにつくりあげた上で、光政は寛文六年八月三日に、

国中民共、仏法を捨、神道儒道を尊候由申、吉利支丹改之証拠無^レ之ニ付、江戸へ被^ニ仰遣^ニ、生所神、或ハ信仰仕所之宮之神主を以、請人と可^レ仕由、被^ニ仰出^ニ、
という、神職請に関する御触を藩内に布達したのである。^⑩

三

領内住民の排仏向儒への趨勢、檀那寺からの離脱、寺僧の退寺・還俗への基礎的な条件を、すでに十分つくりあげた上での、神職請に関する御触であったから、この御触の布達とともに、領民の檀那寺からの離脱、ひいては寺請から神職請への移行、また、その結果としての寺僧の寺院立退あるいは還俗、それにともなう寺院の廃絶という一連の情勢の進行は、急速に岡山藩内にひろまった。『備陽国史類編』寛文九年「国学記」六月晦日の条に載せられている「備前備中御領内、仏道ヲ放レ儒道ヲ用ひ、吉利支丹請ニ座神之神職請判ヲ取差上ケ、儒之葬祭ヲ執行仕百姓町人、并其儘仏道ニ而居申百姓町人之人数覚」に記されている領内各郡および城下住民の人数と、その住民の「神道請」と「仏道請」を対比した数字を左に示してみると、

御野郡男女惣人数壹万八千八百貳拾壹人

内 男九千七百四拾三人

女九千七拾八人

神道請 壹万八千四百七拾八人

右男女

仏道請 三百四拾三人

口上道郡男女惣人数壹万五千七百六拾人

内 男八千三百七人

女七千四百五拾三人

右男女不殘神道請

奥上道郡男女惣人数壹万七千七百貳拾四人

男九千貳百五拾八人

内 女八千四百六拾六人

右男女不殘神道請

邑久郡男女惣人数三万九千九百八拾壹人

男貳万九百六人

内

女壹万九千七拾五人

右男女不殘神道請

和気郡男女惣人数貳万九千貳百九拾六人

男壹万五千貳百拾七人

内

女壹万四千七拾九人

神道請 貳万九千百貳拾人

右男女

仏道請 百七拾六人

磐梨郡男女惣人数壹万八千六拾七人

男九千四百壹人

内

女八千六百六拾六人

右男女不殘神道請

赤坂郡男女惣人数貳万八千貳拾七人

男壹万四千四百八拾四人

内

女壹万三千五百四拾三人

右男女不殘神道請

口津高郡男女惣人数壹万三千貳百五拾五人

男六千八百六拾三人

内

女六千三百九拾貳人

右男女不殘神道請

奥津高郡男女惣人数壹万八千九百三拾四人

男九千八百九拾五人

内

女九千三拾九人

右男女不殘神道請

児嶋郡男女惣人数三万八千九百四拾五人

男壹万九千九百四拾七人

内

女壹万八千九百九拾八人

神道請 三万貳千三百五拾三人

右男女

仏道請 六千五百九拾貳人

備中浅口郡男女惣人数壹万五千七百六拾四人

男八千三拾七人

内

女七千七百貳拾七人

右男女不殘神道請

備中山北南男女惣人数貳万四百四拾人

男老万五百拾老人

内

女九千九百貳拾九人

神道請

貳万貳百三人

右男女

仏道請

貳百三十拾七人

惣郡都合男女貳拾七万五千拾四人

内

男拾四万貳千五百六拾九人

女拾三万貳千四百四拾五人

神道請

貳拾六万七千八百九拾九人

右男女

仏道請

七千百拾五人

岡山町中男女惣人数貳万八千四百五拾九人

内

男老万四千八百六拾人

女老万三千五百九拾九人

神道請

貳万七千八百九拾八人

右男女

仏道請

五百六拾老人

内九拾九人 山伏男女共

郡市惣都合三拾万三千四百七拾三人

男拾五万七千四百貳拾九人

内

女拾四万六千四拾四人

神道請 貳拾九万五千七百九拾七人

右男女

仏道請 七千六百七拾六人

以上の数字からみて、領民のうち神職請に転じたものが圧倒的に多く、領民全体のおよそ九七・五%に達し、殊に備前十郡のうち、口上道郡・奥上道郡・邑久郡・磐梨郡・赤坂郡・口津高郡・奥津高郡の七郡と、備中浅口郡は、領民のすべてが神職請と記録されている。

また、これにともなう領内寺院の廃絶の状況については、藩の記録に出てくる数字が、その記録の書かれた時期によって、当然のことながら若干の異同があるが、神職請施行後九年、寺院の存廃がほぼ定着したと思われる延宝三年（一六七五）の『備前備中御領分寺数帳』に記載されているところによると、神職請の御触が布達された寛文六年以前の領内の惣寺数一〇三六寺（禪宗五四、天台宗一四八、真言宗四〇一、浄土宗一六、日蓮宗三九七、一向宗二〇）のうち、延宝三年までの間に廃寺となった寺院の数は、諸宗派合せて五九八寺で、全体のおよそ五八%。これを宗派別にみると、禪宗一三、天台宗四八、真言宗一八三、浄土宗二、日蓮宗三四八、一向宗四である。真言宗と日蓮宗の廃寺が殊に多いのは、もともと両宗の寺院が岡山藩内には多かったことから当然ではあるが、この両宗のなかでも、真言宗寺院が四〇一寺のうちの一八三寺で、約四五・六%の廃寺であるのに対して、日蓮宗寺院の廃寺は、三九七寺のうち三四八寺で、実に八七・七%の多きを数えている。この結果、延宝三年の段階で岡山藩内に残った寺院の惣数は四三八寺、宗派別にして、禪宗四一、天台宗一〇〇、真言宗二一八、浄土宗一四、日蓮宗四九、一向宗一六となっている。更に、岡山城下および各郡別の寺院廃絶の状況を、宗派別にして表示すれば、左のごとくである。

| | (宗派) | (元の寺数) | (廃寺数) |
|------|------|--------|-------|
| 岡山城下 | 禪宗 | 一四 | 〇 |
| | 真言 | 一二 | 〇 |
| | 天台 | | 一五 |
| | 浄土 | | 一三 |
| | | | 二 |

| | | | | |
|------|-----|-----|---|----|
| 御野郡 | 日蓮 | 一三 | 四 | 一三 |
| 禪宗 | 一 | 一 | 一 | 七 |
| 真言 | 一〇 | 二 | 九 | 〇 |
| 口上道郡 | 禪宗 | 六 | 〇 | 〇 |
| 真言 | 四〇 | 一 | 一 | 九 |
| 日蓮 | 六 | 三 | 一 | 〇 |
| 奥上道郡 | 天台 | 二〇 | 六 | 一 |
| 日蓮 | 七 | 七 | 三 | 八 |
| 日蓮 | 七 | 七 | 四 | 〇 |
| 邑久郡 | 天台 | 一九 | 七 | 三 |
| 日蓮 | 一八 | 九 | 一 | 〇 |
| 和気郡 | 天台 | 一二 | 三 | 二 |
| 浄土 | 一 | 〇 | 二 | 六 |
| 磐梨郡 | 一向 | 四 | 〇 | 四 |
| 天台 | 六 | 二 | 六 | 六 |
| 赤坂郡 | 天台 | 二六 | 三 | 四 |
| 日蓮 | 四三 | 三五 | 二 | 二 |
| 津高郡 | 天台 | 七 | 二 | 六 |
| 日蓮 | 一三一 | 一二三 | 一 | 一 |
| 兒島郡 | 禪宗 | 二三 | 三 | 〇 |

| | | | | | |
|------|----|----|----|----|----|
| 真言 | 九〇 | 四一 | 日蓮 | 二 | 二 |
| 備中之内 | 一〇 | 九 | 天台 | 二七 | 二三 |

| | | | | | |
|----|----|----|----|---|---|
| 真言 | 四二 | 二九 | 浄土 | 一 | 〇 |
| 日蓮 | 一〇 | 八 | 一向 | 一 | 一 |

この数字をみると、備前国内で日蓮宗の殊に弘まり栄えた地域であった津高・御野・赤坂・磐梨の四郡内において、津高郡一三一寺のうち一二三寺、御野郡九五寺のうち九一寺、赤坂郡四三寺のうち三五寺、磐梨郡では四六寺のすべてというような、日蓮宗寺院の殆ど潰滅的な廃絶が進んだ様子をうかがい知ることができる。

四

これらの廃寺となった日蓮宗寺院のうちに、不受不施派に属する寺院がどれくらいあったのか、その明確な数については十分詳らかではない。しかし、このことについて、不明確ではあるが一応数字の示されている史料として、寛文七年三月に池田光政が江戸で大老酒井忠清に、領内の廃寺、僧侶の還俗・追放、寺領没収等の状況について、数字を挙げて報告したものが、寛文七年の『御留帳』に載せられており、これは前稿にも引用したが、ここに再掲すると、それには次のように記されている。

（酒井忠清）
雅楽様江被_レ掛_二御目_一候備前備中御領分寺数坊主数之覚

寺数千四拾四 坊主数千九百五拾七人

寺領貳千七拾七石九斗貳升叁合

内

三百拾三ヶ寺 坊主五百八拾五人 不受不施宗門先年追放

貳百五拾ヶ寺 坊主貳百六拾貳人 天台・真言、立退・還俗、或ハ追放、

二口合八百四拾七人 上り寺領百三拾九石九斗三升八合

残寺数四百八拾壹 坊主千百拾人

寺領千九百三拾七石九斗八升三合

ここに挙げられている数字をみると、前掲の延宝三年の『備前備中御領分寺数帳』に記載されていた数字とは若干異っており、これは寛文七年三月の時点での実数とみてよいであろうが、この記述で疑問な点は、不受不施派以外の日蓮宗寺院に関する記載が、文字の上に表わされていないことである。不受不施派でない日蓮宗寺院の中にも廃寺となったもののあったことは確かであるが、「三一三ヶ寺 坊主五八五人 不受不施宗門先年追放」と記されているものの中に、日蓮宗寺院がすべて一括して入れられているのか、あるいは、その他の「二五〇ヶ寺」の中に、不受不施派以外の日蓮宗寺院は含まれているのか、そのいずれとも全く不明確で、従って前掲の記述から、直ちに不受不施派の廃寺の数が三一三寺と解釈してよいのかどうか、なお疑問としなければならぬ。しかし、いずれにしても不受不施派寺院に対する禁圧が、他の諸宗の寺院にくらべて、殊に厳しいものであったことは想像するに難くない。

岡山藩における多数の寺院廃絶、僧侶の追放・還俗、寺請から神職請への大量の移行という異常な事態を、現地に於いて調査せしめるために、幕府は寛文七年八月に、巡見使を岡山藩の領内へ派遣しているが、その際に、巡見使からの質問に対する「百姓共御返答之荒増」として、寛文七年の『御留帳』^⑤に記載されているものの中に、次のような記述がある。先ず僧侶還俗のことについて、巡見使から「坊主ハ押而還俗被_レ仰付_二候と御聞候、不_レ殘還俗仕候哉」との尋ねに対しては、「心々ニ而候故、出家も多候」と、領内全体としては、還俗するや否やのことは僧侶の自由意志にまかされているから、今でも領内に僧侶は多く残っていると答えたとしているが、更に、津高郡内の「勝尾村ニ而還俗之事御尋」があったのに對する返答には、「当郡ハ不受不施ニ而候故、大方還俗仕候と申候」と記されており、

岡山藩内で不受不施派の最も盛んな地域であった津高郡内では、前掲の延宝三年の寺数帳の数字でも日蓮宗寺院一三一寺のうち一二三寺が廃寺となっているように、大部分の寺僧が還俗したと答えている。そして、その僧侶還俗の事情も、一般的、また表面的には「心々ニ而候」と、決して強制したものではないとされてはいるが、さきにも触れたように、領民の寺請から神職請への転換、檀那寺からの離脱、それにともなう寺院の維持運営の困難による寺僧の退寺、ないしは還俗という事態を、必然的に導き出すような一般的情勢が、巧みに作意的につくり出された一方で、日蓮宗不受不施派の多い津高郡などでは、かなり激しい強制的な圧力が、僧侶や信徒たちに対して加えられたようである。前述の寛文七年八月に幕府の巡見使が津高郡を廻ったとき、郡内の百姓のひとりが、巡見使に差出した目安の中に、次のようなことが訴えられている。

奉_レ上_レ恐言上_一は、我代々宗門ヲ今度平儀つぶされ、曾而不_レ存儒法ニ被_ニ仰付_一、同俗共ニ難義仕而は、出家国ヲ去り、又は落墮仕、若落さらぬニは、おさへて魚類ヲくわせ、とかく還俗仕れとの責つよく候へハ、自害仕者、出家・在家ニ数多御座候、迷者、絵像・木像・寺堂破却在_レ之、又物うき事、民は君子ノなやミヲいとくに恐れ候に、為_ニ御意_一奉行・代官、寛文六年午ノ七月中比々至_ニ于今_一、其責難_レ奉_レ尽_ニ筆紙_一、有者しはられ籠_ニ入られ、又爰かしこへ他国仕もの、其数不_レ存、寛文六年寔_ニ乱国_一たり、仰願は天下之御風俗ニ被_ニ仰下_一候者、万民一同ニ現当難_レ有奉_レ存候、所以ニ日本仏法流布ノ本国と承_ニ、新学宗ヲひろめ候て、慈悲正直之聞へ候へ共、幾ばく相違有事ヲ、あら具申上奉ル、

この訴えによれば、自分たち代々の宗門、この場合おそらく不受不施派であろうが、これを今度すべて一様に潰されて、未だかつて何も知らない儒法を押しつけられ、僧侶共に迷惑し、僧侶の中には国を立退いたり、あるいは還俗するものが相ついだ。そして還俗しないものには厳しい責苦が加えられ、ために自害するものさえあったし、また縛られて牢に入れられたものもあり、郡奉行や村代官たちによるこのような迫害は、寛文六年七月から今に至るまで、

筆紙につくし難いものと述べ、このような備前国の状態は、「まことに乱国である」とさえいい切っている。このような有様で、本来仏法流布の国と承っている日本国に、「新学宗」即ち儒教を弘めて、慈悲正直と世間では噂されているようであるが、実情は、いささかそれと相違していることを申上げたい、と訴えているのである。そしてまた、

新学すゝめヲ一郡ニ三人四人つゝ御置被^レ成、是以皆、百姓痛ニ而御座候、

とも述べて、「新学すゝめ」即ち儒教を庶民に勧める役目のものが、一郡に三人ないし四人ずつ置かれ、これも百姓たちにとっては苦痛なことであるともいつている。このようなことは、領内のすべてにおいてはなかったとしても、殊に不受不施派の盛んであった地域などでは、裏にかくされた実情であり、また、少なくとも一部の領民たちが心にとどめた実感であつたことが察せられるのである。

同じとき、津高郡内の出寺僧のひとりであつたと思われる行好というものが、同様に巡見使へ差出している目安^⑨にも、今度御上使様の御来駕を迎え奉るのは、「うどんげの花に越え、一眼の亀」にも逢う思いであると前置して、去年七月中旬ごろより、「新学法」を国にお弘めあり、その勢いは「大風、草露を払うが如く」で、奉行や代官の仏者に対する御責めは厳しく、その責苦のために、「自害をも仕、或は他国へ逃、又ハ落墮仕り、僧侶ノかなしき、古今未^⑩見聞」といい、更に「皆奉行等、聖徳を能さへつられて、ゑこひいきの有事を、万民是をかなしむ」と、奉行や代官たちが口には聖賢の道を説きながら、実際の行動のそれに伴わないことを皮肉って、丁度そのようなことをいいあらわした古歌があるとして、

世中の人ハ丸桶、四方ふた、口と心ハあわぬ物かな

との歌を掲げ、「諸事にも当国之御仕置、聞とは替ル御事ニ而御座候」と述べている。そして磐梨郡や津高郡内での迫害の実例を挙げて、

只かなしきハ、岩生(磐梨郡)こより屋田部之村之者、又ハ津高こより建部上村之者共、勝候て責ニ合ぬる事、他国之聞えもあまりニ御座候、先、矢田部村之者六七人之内三人は、三月(年)ろろうニ被_レ入、今ニ至まで出_レ不_レ給、又津高こより上村をハ、齋木四郎左衛門と申せしものニ而御座候か、仏者きらい、新法を専として、古(意)い申たる道心者などのい(應)をりをこわし、所を払、扱又十人計、しゆ法を不_レ用者御座候をハ、去年兩度之せめ、或ハく_レり、又有時ハ自身之所ニあいつけ、二三日もあたり之者ニ番をさせ、夜ハか_レりをたかせ、其後又なわをかけ、過(意)たいをかけ候、其にくミ不_レ果故、此中四五日以前ニ、御手ぢ(鮎)ようをおろさせ、御上使之御通之後ニハ、又もせめんと被_レ申候、何共く物うき事と、かなしむ事ニ而御座候、

と、その迫害による窮状を訴えている。これら巡見使へ差出された目安にみえる訴えの事實は、津高・磐梨・御野郡地方を中心とする日蓮宗不受不施派の僧侶や信徒に対するものであったとみてよいであらう。

この二つの目安の中に、奉行や代官たちからの責めによつて、寺僧のうちには自害するものさえあったと述べられていることに関連して、寛文六年から四十年ばかりのちの宝永四年(一七〇七)に、藩内の各郡の肝煎から、寛文六年に廃寺となつた郡内各寺院の廃絶の事情およびその後の様子について、藩庁へ書出した『寛文六年亡所仕古寺書上帳』と題する記録があり、その中に、次のような事柄の記されたものがみられる。即ち、不受不施派の寺院であつた津高郡中原村の浄本寺の廃寺となつた事情について、

右者、法花宗御野郡津嶋村妙善寺末寺ニ而御座候、寛文六年ニ住寺相果、無住ニ而御座候ニ付、寺株上り地ニ、寺・寺家共所々へ被_レ遣、亡所仕申候、但、本尊釈迦、絵本尊、同村吉兵衛預り居申候、

と記され、また、同じく津高郡西菅野村の妙福寺についても、

右者、法花宗御野郡津嶋村妙善寺末寺ニ而御座候、寛文六年ニ住寺相果申、弟子三人御座候内、式人立退、忝人如林還俗仕、俗家ニ罷成り、寺株・田畑山藪不_レ残、還俗人理兵衛ニ被_レ遣、于_レ今作仕居申候、但、本尊釈迦、

坊主立退候時分、取退申候、

とあり、これらの記事の中に「寛文六年ニ住寺相果申」^(持)と記されているのは、前掲の目安の中にいわれている「自害」だったのではないかと推察される。また当時備前における不受不施派の中心的な寺院であつた御野郡津島村の妙善寺の廃寺、および、その後の様子については、

右は日蓮宗ニ而御座候、本堂・寺家、并下寺福居之浄円寺共、屋敷畑畝耆町七反七畝拾五歩半、御免地高引ニ成居申候所、寛文六年神道ニ成候節、住持并寺家・下寺共、出家中不_レ殘引退仕申候ニ付、寺亡所仕申候、其後御弘ニ成、入札被_レ為_二仰付_一、本堂并本尊不_レ殘、中買共落札ニ成申候、諸屋敷畑八反拾三歩、延宝九年より貞享三年迄、年々発_二被_二仰付_一、御年貢払上申候、殘畝山林ニ罷成居申候畑へ、村中惣作ニ仕居申候、という有様であつたし、妙善寺と並んで、津高・磐梨・赤坂郡地方の不受不施派の中心的寺院であつた津高郡金川村の妙国寺については、

右は日蓮宗京都妙覺寺末寺ニ而御座候、寛文中_ニ以前に無住ニ成居申候、
としているが、同寺の寺中の寺院であつた本住院・教雲坊・本光坊・善住坊・円住院・要玄坊・乗円坊・一行坊・大乗坊・養林坊なども、すべて住持が還俗している。例えば本住院についてみると、

右ハ日蓮宗同村妙国寺寺中ニ而御座候、寛文六年ニ還俗仕、俗家罷成候、寺株・田地山藪共、還俗人了運ニ被_レ遣候、作仕居申候処、八年以前ニ相果、同村彦十郎作仕居申候、

と記されている。また妙国寺末寺の御野郡下伊福村の石井寺の場合なども、

右は日蓮宗津高郡金川村妙国寺末寺ニ而御座候、寛文六年神道ニ罷成、旦那はなれ申ニ付、住持立退、明寺に成申故、番人御付置被_レ成、^(貞享四年)式拾年以前ニ御弘ニ成、^(廢)磨屋町菓師院へ買、^(眞言宗)寺跡荒申候、右石井寺地内に寺家十軒御座候所、住持と一所に立退申候、寺家跡屋敷は開田になり申候、

と記されているが如き状況であった。これらの事例を通じても察知し得るように、備前不受不施派の中核的存在であった津高郡金川村妙国寺・御野郡津島村妙善寺の両寺、および、その末寺をはじめとして、岡山藩内の不受不施派寺院の殆どは、この時期に廃絶に帰しているのである。

五

このようにして、池田光政の排仏向儒の理想のもとに行なわれた神職請制度は、寛文五年の幕府の諸寺院統制の強化、殊に日蓮宗不受不施派の禁教という事態を背景にもって、岡山藩内の大部分を蔽う制度として普及し、この制度の普及にともなう領民の檀那寺からの離脱、寺僧の立退・還俗などによって、日蓮宗不受不施派をはじめとして、その他の諸宗寺院をも合せて、藩内の寺院の廃絶するもの、実に約六〇〇寺、藩内惣寺数のおよそ五八％に及ぶ異常な事態を現出したのである。

この神職請制度は、その後、池田光政が天和二年（一六八二）に卒去してのち五年、嗣子綱政の治世の貞享四年（一六八七）に、幕府からの強い要望もあって改廃され、寛文六年以前の寺請制度に復することになったのである。しかし、この神職請の制度が、施行された期間は約二十年という、さして長からざる年月であったとはいえ、幕府の抑制や、世の批判の中で、敢えて行なわれたことは、光政の真摯な儒教尊崇への志向と、その理想実現へ向っての強固な意志を、よくうかがい知ることができるとともに、江戸時代諸藩の宗教政策の中でも、まさに特異な施策の遂行として瞠目すべきものであったといつてよいであらう。

光政はまた、その儒教尊崇の立場から、明暦元年（一六五五）以後、祖先の祭祀にも仏事による追薦の儀を止めて、儒法による祭儀を行ない、万治二年（一六五九）には城西の石山の地に、祖考池田輝政、祖妣中川氏夫人、先考池田利隆を祀る宗廟を建営したが、更に寛文六年には領内の和気郡和意谷^{わいだ}の敦土山^{とんど}に新たに塋域を築営して、それまで京都

花園の妙心寺の塔頭護国院に葬られていた輝政・利隆らの遺骨を、翌七年閏二月に和意谷の新塋域へ改葬し、その儀すべて儒葬の儀式に則って行なわれている。^④

このように祖先の葬祭にも、みづから儒法を堅持した光政であったから、寛文六年八月三日に、神職請に関する御触を初めて領内に公布したとき、仏法を離れて神職請に転じ、檀那寺を失った領民たちが、今後行なうべき葬祭の仕方について、その大要を同時に教示している。江戸時代に、藩主が領内の庶民に対して、神儒的な葬祭の法式を論達したものととして、注目に価するものと思われるので、『備陽国史類編』寛文九年「国学記」所載の記事に従って、その全文を左に掲げることとする。^⑤

御領分之民共、殿之御好ミ之道とて、弥盛ニ儒道ヲ好ミ、神道請ニ罷成、仏道請之者僅ならてハ無_レ之候、士中ハ老中より諸士ニ至迄、銘々考ヲ以、儒道之葬祭、分限相応ニ執行仕候得共、輕キ百姓町人ハ其程ヲ不知、思ひく_レたるニ依テ、役人ニ被_レ命、如_レ左相触候、

儒道ヲ尊ひ吉利支丹請ニ神職ヲ立ル下民葬祭之大略

一病人死する時ハ、側におるもの成程物静にして終らしむへし、さわかしき時ハ、病人終るに望て精神乱るゝもの也、

一病人死せんとする時、其勢ひ、なるへくハ東の方へ首をしてふさしむへし、病人うこしかたき儀あらハ、何かたへ首をむけてもくるしからず、病人息たへ脉きへて、温なる事もなく、死に極る時ハ、行水の用意をいたし、神主^{（胡粉）}を書へし、

ごふんか、^{（庵）}たうの土を大豆のこか、しやふのりを入れて、皿の中にて、指を以て能ときてぬり、其上ニ書なり、

粉面^{フシメ}

孝子何右衛門奉祀
顯考何左衛門嚴君
神主

父之神主ハ如^レ此題スル也

陷中^{カシチ}

年号幾年^干幾月幾日生備前何郡何村享年幾
何左衛門氏某諱某小名某
神主
年号幾年^支幾月幾日死 葬備前何郡何村

粉面^{フシメ}

孝子何右衛門奉祀
顯妣某氏室人
神主

母之神主ハ如^レ此題スル也

陷中^{カシチ}

年号
某氏小名某
年号

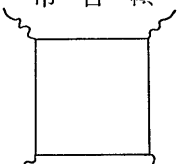
神主

一此時の行水ハ、別に石なりとも土なりとも、かまとのことくして、湯をわかし、かミあらひ、行水さすへし、乍^レ去、勢ひにより、常のかまとを用ひてもくるしからず、たらい桶も、常に用るにてもくるしからず、行水させ候ハ、布にても木綿にてなりとも、水気をすきとふき、常のことくかミをゆひ、爪をとり、ひけをそり、死人の

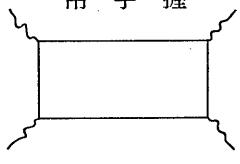
きる物の中にて新きをきせ、帯・下帯させ、足袋はかすへし、きる物は夏冬の時節に応し、綿入・あわせ・帷子
きすへし、上下ハ棺の内へ入、死人の爪・ひけをハ棺のわきへ入るゝ者也、

二右のこたく行水させ、きる物をきせ、左の図のこたく、（曲尺）帷目巾をこしらへ、面をおゝひ、握手帛にて両手をつゝ
ミ、南枕にして、あを（廻）のけにふさしめ、静なる所に置、死人の枕もと東の方に机を置、其上に茶菓子をそなふへ
し、

巾 目 帷


布にても木綿にても、日本（曲尺）かね七寸
七分四方にして、四方の角五寸程つ
つのひほをつけ、死人の面をおゝひ、
四方のひほにて、首のうしろにても
すふへし。

帛 手 握


日本（曲尺）かねにて長七寸七分、横三寸貳分に
して、すミ／＼にひほをつけ、如此貳つ
こしらへ、死人の手をうちよりつゝ、ミ、
そとへまハし、ひほをむすふへし。
帷目布・握手帛いづれも、
ふたへにすへし。

一何板にても棺をさし、棺の中へ死人を入れて、其すきまを、きる物の類又ハくり綿にて能つめて、蓋をして、釘に
てしむへし、

一棺を野へやる時、木綿にても布にても、四幅を棺の長さより少し長ク、棺の前後へかゝる程にして、右之四幅を

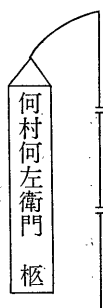
ふとんなのこことく、わきをぬひ、棺に打かけてやるへし、

一棺を野へやる次第、先へ銘旌を持せ、次に神主・机を持、扱、棺をかき、一類共供すへし、

一銘旌の仕様、赤き紙を長さ五尺はかりにつき、横は紙は^(一)ほとにして、何村の某柩と大文字に、^(胡粉)こふんにて書、

竹さほにゆひつけて持へし、銘旌之上ノ方をハ、^(意)くつ屋のかつしやうのことく、板を入てする也、

銘旌



葬の時、此銘旌さほ
をのけ、棺の上に置、
うづむべし。

一埋へき所の地を前かとに吟味し、壙をほるへし、壙をほる前に、先、地祭をするなり、其仕様ハ、机、火入、沈香、徳利に酒を入、かわらけを持ゆき、新敷筵を弔式枚、壙をほるへきと思ふ東のわきに敷、其上に机を北の方になをし、火入・香をおき、かわらけに酒を一はいつき、机の上に置、扱、香をたき、北に向て祝文をよミ、再拝して、酒を地にこほすへし、其死人の遠き一門にても、他人にても、たのむへきなり、

祝文

維

年号幾年歳次干支幾月干支越干支朔幾日干支、某姓名、敢昭告^{テラカニス}于土地神^ニ、今為^ニ某姓名^ノ、^{母ナレハ何氏室人ト書、氏ナケレハ名ヲ書也、}宮^ス建宅兆^ヲ、神其保^{レンシ}、佑^{ケテ}、俾^メ無^シ後艱^ヲ、謹以^テ清酌^ヲ、^{祢薦ニ于神ニ}尚饗^ヲ、

よミ終て再拝し、祝文をやくへし、

一棺を壙へおろす時、首の方を北にし、足の方を南にしておろすへし、扱、喪の主人、棺に向て再拝すへし、一棺をおろし、壙へ土を入そめて、扱、神主を机の上に南むきになをし、火入・香を置、酒をかわらけにつき、菓子^ヲを備へて、祝文をよむ也、

維

年号幾年歳次干支幾月干支越干支朔幾日干支、哀子某、敢昭告于何左衛門殿君神主、母ナレハ何氏室人、氏ナケ形婦ニ宿^{ハストモ}、神返ニ室^{ハシ}、伏^{シテ}惟^レ、尊靈是憑^{ユリ}是依^ユ、

よミ終りて、一類再拝して、神主のともをいたし、宿へ帰るへし、

但シ、此祝文ハ宿へ持候て帰、やくへし、

一宿へ帰り、喪の主人、神主を机になをし、香をたき再拝し、常のことく膳ぶを調へ、何にても腥き物をすへ、酒を三献すむへし、但、初献の時、酒をつき神主の前に置、其身神主の前にかしこまり候て、可^レ申へ、今日虞の祭をすむ、こいねか^{ハク}へうけたまへと、口のうちにて神主へつけ再拝し、扱、酒三献過、箸をめし^(飯)によこに立、常之者のものくふ程間を置、茶をすめ、再拝して膳をとり、神主を納へし、如^レ此するを初虞の祭といふ也、虞の祭とハ、親のたましゐの神主によりたるを、子の家におちつけ安すんせしめんか為なり、

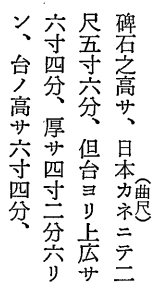
一初虞の祭して後、乙丁己辛癸、此内いつれの日なりとも、早天に、右のことく祭をすへし、是を再虞の祭といふ也、

一再虞の祭して後、其翌日にても、またハ其後、甲丙戊庚壬、此内いつれの日成とも、早天に、右のことく祭をすへし、これを三虞の祭といふなり、

一忌あき、可^レ罷出^ニと思ふ前日、又虞祭のことく祭をすへし、是を卒哭の祭といふなり、但、神主へつけ候ことは、今日卒哭の祭をすむ、こいねか^{ハク}へうけたまへと告るなり、右の祭四度ながら、かミあらひ、湯をあびて、とりおこなふへし、

一惣而喪の主人、忌の内ハ毎日朝晩、茶菓子を備へて、再拝すへし、

一棺をおさめ候墳土の能落つきたる時、墓をつくへし、根置棺のなりに、北をひろく南をせはく、長ミにつくへし、



右葬の儀、礼式を加へ度存ものハ、文公家礼を考へ、分限に応し儀式を可^レ加ものなり、

儒道を尊ひ、親の神主を設、吉利支丹請に神職を立候民共、忌日・墓祭・朔日・十五日・節旬の礼儀仕度存ものへ、如左いたすへし、但、忌日とハ人死候其月日をいふなり、毎月の死日をハ儒道ニハ祭らぬものなり、忌日之儀

一前一日さかやきをそり、髪あらひ、湯あひ、けかれさるやうにたしなミ、酒にんにくの類をくハす、可_レ成ならハ病人死人の所へも行ヘからず、如_レ此するを、けつさい(潔斎)といふ也、
一前日さうちいたし、なべかまをあらふへし、
(掃除)
(鍋釜)

一其日早天におき、神主を出し、香をたき、再拝し、何にても食物をこしらへ、椀か茶碗かにもり、腥きものをそへ、酒あらへ、かわらけにてなりとも三献すゝむへし、但、初献の時、酒をつき、神主の前に置、其身かしこまり候而、可申へ、今日忌日の祭をすゝむ、こいねかへくはうけたまへと、口のうちにて神主へ告、再拝すへし、

扱、酒三献過、箸を飯によこにたて、勝手へ出、常のものゝ物くふほと間を置、茶を備へ、再拝して神主を納、膳をとるへし、

一忌日には、親に別れ候時の事を思ひ出し、かなしきゆへに、魚鳥をくハす、酒をのます、遊ハさるもの也、

墓祭之儀

一墓へ何にても備へ度と存ものハ、三月朔日より十日までのうちに、勝手次第、何にてもそなへ、香をたき、再拝すへし、儒道には、七月に墓参いたし墓に火をとほし、并に盆祭りハせぬものなり、

朔日・十五日・節句之儀

一毎月朔日の朝ハ、香をたき、茶にても湯にても神主へそなへ、再拝すへし、時の作りものゝ初尾出来合有^レ之候て、神主へ備へ度存候ハ、此時そなへ再拝すへきなり、又毎月十五日の朝ハ、香をたき、茶ニ而も湯にても備へ、再拝すへし、

一正月元日・三月三日・五月五日・七月七日・九月九日、右朔日のことく香をたき、茶にても湯にても備へ、再拝すへし、但、此日何にても食物こしらへ合候而、神主へそなへ度存候ハ、備へ再拝すへし、右祭の儀、礼式を加へ度存ものハ、文公家礼を考へ、分限に応じ儀式を可^レ加者也、

儒道を尊ひ、親の神主を設、吉利支丹請ニ神職を立候下民共ハ、八月の中に作り初尾にて、いきたる親をふるまふことくおもひ、神主を祭へき事、

一前一日さかやきをすり、かミ洗、湯あひ、けかれさるやうにたしなミ、酒にんにくの類をくハす、可^レ成ならハ病人死人の所へも行へからず、如此するを、けつさいといふ也、

一祭の前日、まつるへきと思ふ座敷をさうぢいたし、な^{（竊）}へかまわ^{（盆）}んかくな^{（枕）}と、あらひ置へし、

一まつりの日、一村の内にて父方の二類くミ合、其内にて家もひろぎものゝ所を亭主にため、祭の日早天に、めい／＼の家の神主をかゝへまいり、祭の亭主の座敷になをし、神主のおゝひをとり、あつまり候もの一同に再拝し、かしこまりおるへし、扱、あつまり候ものゝうちにて惣領筋の者老人、香案の前へ罷出がしこまり、香をたき、酒をかわけにつき、茅砂の上にこほし、再拝すへし、是を降神といふ、

但、香案とハ、つくへの上に香炉に火を入、香を置、酒を徳利に入、かわらけをそへ置事也、茅砂とハ、きれ

いなる砂をさはちに入、ちがやを一にぎり、長さ五六寸計にきり、もとを糸にてゆひ、砂へ入て立おく事なり、

一膳をめい／＼の神主へすゆへし、妻子なども心次第に祭の所へまいり、何にても、まつりの手つたい仕へし、

一酒を三ごん、めい／＼の親の神主へすゝむへし、但、初献の時、酒をつき、神主の前にをき、其身神主の前にかしこまり候て、可レ申へ、今日仲秋の祭をすゝむ、こいねかへくへうけたまへと、口の内にて一人つゝ其親の神主へつげ、再拝すへし、

一酒三献すぎ、神主の前へめい／＼参、箸を飯によこに立候て、勝手へ出、常の者のめしたへ候程間をおき、茶をめい／＼持候而、神主へそなへ、皆々一同に再拝して、膳を取、神主をおさめ、祭の備物を、其家にてより合候一類共いたゝきたへ候て、子共息災にて幾久しく親々を祭り候様にといわひ、此日は遊び、家子などもやすませ可レ申候、扱、其日いつにても、めい／＼宿へ帰候時、神主をかゝへもとり候て、不断の所におくへし、右祭の儀、礼式を加へ度と存ものへ、文公家礼を考へ、分限に応し儀式を可レ加もの也、

口上ニ申渡覚

一食米、神主一位ニ、三合より一升迄の内、いきおひ次第、祭の亭主之所へ、前日より遣し可レ置事、
一酒・しほ肴、寄合候者共申合、祭の亭主の所へ前日可レ遣、亭主へ薪・塩しほ・塩しほを馳走可レ仕事、

一香の事、沈香無_レ之ものハ、からよもきをほし、粉にして、たき可_レ申事、

一机無_レ之ものハ、櫃のふたか、戸板かを、机のかへりに可_レ用事、

一椀にても茶碗にても、神主の一位に一せんつゝ、おしきとにも、^(應)_(弁數)盃にはかわらけにても不_レ苦候間、兼而こしら

へ置、祭の前日より、祭の亭主のかたへ可_二遣置_一事、

(以上)

註

① 『岡山大学法文学部学術紀要』五号、のちに拙著『武家時代の政治と文化』に所載。

② 『徳川禁令考』(前集第五)巻四十「寺社」第四十五章、二五七四、諸宗寺院法度。

③ 同右、二五七五、下知状。

④ (寛文七年)七月八日付、磐梨郡代官村主九右衛門書上覚、(池田家文庫P3-10)。

⑤ (寛文七年)七月八日付、赤坂郡代官和田太郎左衛門書上覚、(池田家文庫P3-10)。

⑥ 『備陽国史類編』寛文七年「上令并言上」四月晦日の条、酒井雅楽頭へ被遣書付、(池田家文庫A1-47)。

⑦ 『御触書寛保集成』(十三、御朱印御判物御感状等之部)六九五。

⑧ 『破鳥鼠論』(『日蓮宗宗学全書』不受不施講門派部「日講上人集」所収)。宮崎英修『禁制不受不施派の研究』第一部第三章第四節1不受派の内証(一二二~一二八頁)、

辻善之助『日本仏教史』近世三、第十章第十一節(二四五~二四八頁)参照。

⑨ 『備陽国史類編』寛文七年「上令并言上」四月晦日の条、酒井雅楽頭へ被遣書付、(池田家文庫A1-47)。

⑩ 『御留帳』寛文六年八月三日の条、(池田家文庫A1-82)。

⑪ 池田家文庫A1-49。

⑫ 池田家文庫P1-373。

⑬ 『御留帳』寛文七年三月十六日の条、(池田家文庫A1-71)。

⑭ このとき派遣された巡見使は、稻葉清左衛門・徳永頼母・市橋三四郎の三名で、八月十日から十三日にかけて領内を巡見している。

⑮ 『御留帳』寛文七年九月二日の条、(池田家文庫A1-72)。

⑯ 寛文七年末ノ八月日、備州津高郡百姓目安之写、(池田家文庫P3-17)。

⑰ 寛文七年八月十一日、備前津高郡行好目安、(池田家文庫 P 3—17)。

⑱ 池田家文庫 P 1—162、177。

⑲ 『寛文六年亡所仕古寺書上帳』に記載されている日蓮宗寺院で廃寺となったもののうち、妙国寺および妙善寺の末寺とされているものをみると、津高郡日蓮宗寺院の廃寺一九のうち妙国寺末寺四一、妙善寺末寺八、御野郡日蓮宗寺院の廃寺六五のうち妙国寺末寺一〇、妙善寺末寺一六、磐梨郡日蓮宗寺院の廃寺四〇のうち妙国寺末寺九、赤坂郡の日蓮宗寺院の廃寺三一のうち妙国寺末寺一四、四郡合せて、妙国寺末寺七四、妙善寺末寺二四を数えている。

⑳ 『備陽国史類編』寛文九年「国学記」六月晦日の条、(池田家文庫 A 1—49)、『池田光政公伝』第四十二章「廟

祭」参照。

㉑ 『備陽国史類編』寛文九年「国学記」六月晦日の条、(池田家文庫 A 1—49)、『池田光政公伝』第四十三章「和意谷改葬」参照。なお天和二年に光政卒去の際にも、その葬儀は、もちろん儒礼をもって行なわれ、同じ和意谷敦土山に葬られた。

㉒ 『備陽国史類編』寛文九年「国学記」六月晦日の条、(池田家文庫 A 1—49)。なお、この論達の文は、のち寛政年間に岡山藩士大沢惟貞が編修した『吉備温故秘録』巻之十九「葬祭」の部にも載せられているが、文章にかなりの異同がある。本稿では、藩庁の記録である『備陽国史類編』記載のものに依った。